

『吾輩は猫である』 九ポ堂版（寸珍版）の表記について

漱石の『猫』は初出以来百年を超えた。今回は天上の漱石の方から現代にタイムスリップしてもらい、今なら彼がどんな校閲方針を抱くかを想定し、それを踏まえて（忖度して？）、DTP組版の調整、誤植・脱字つぶしに努めた。こうして出来上がったテキストについて、天上に居ます著者がどう思うか知りたいところだが、それは詮無きこと。

ところで、リタイア老人の孤独な手作業でこの全作業を全うするのは、傍目からは単なる時間の浪費であろう。しかし、こんな作業が今日では曲がりなりにも可能だという点には感慨深いものがある。老後の無為の慰めは早朝散歩だけでない。

この九ポ堂版『猫』の刊行は、昭和二六年八月だったから、すでに四年の時を経ている。このテキストに大倉・服部両書店刊の寸珍版（明治四四年刊）を採用した理由は「この翻刻に際して」に記した通りであるが、その後、現行の岩波書店版漱石全集第一巻（平成二八年刊）の『猫』本文との読み合わせを老妻の助けを得て行った。

岩波版では、いわゆる漱石による元原稿と初出、初版のテキストをベースに参照して校閲する姿勢を明らかにする一方、寸珍版は完全に無視する姿勢を取っている。その存在にすら言及しないという徹底ぶりだが、妙な事実を発見してしまったので、この小冊子を制作することにした。ご参照いただければ幸いです。

岩波版全集の巻末に挙げられた「校異表」で、▼印が付された部分は「諸本のいずれとも一致しない訂正を施した」との断りがあるが、それが一二箇所。全集版編者の独自判断に従って校閲したという意味に読める。だがその内、七二項目が「寸珍版」の表記と一致するのはどういう分けか？ 仮に「独自判断」の結果であったとしても、先出とこれだけ重なるのであればそれなりの断りがあつて良いのでは？

言わずもがなだが、私は、寸珍版『猫』こそが最後の著者認定テキストであるとする立場を取っている。九ポ堂版で拾い出した岩波全集版『猫』との校異全項目は五六八箇所だが、これは別の機会に……。

酒井道夫（平成三〇年七月）

冊子末尾に正誤表を添えました。すみません。

『吾輩は猫である』九ポ堂版（寸珍版）と、岩波版「漱石全集」『猫』校異表内で▼印を付す項目との異同

「定本漱石全集」（二〇一六刊）の巻末に掲げられた校異表中で、「諸本のいずれとも一致しない訂正を施した個所（▼印）であるとして挙げられている項目を拾い出し、これと九ポ堂版（寸珍版）による表記との異同を示した。

九ポ堂版（寸珍版）

頁・行（頁・行）

岩波全集巻末の異同表中で▼印を付している個所（全一二個所）

○印では、九ポ堂版と岩波全集版の表記が一致している（七二箇所）。

（第二章）

033-08	041-10	H君	033-10	A君		001
037-05	046-09	せしむ」吾輩は	037-04	せしむ」吾輩は	○	002
039-10	049-09	居る。」と大きな	039-07	居る」と大きな		003
042-01	052-09	「やあ御目出度う、	041-11	「やあ御目出度う、	○	004
044-03	055-07	入らしやい」と	043-11	入らつしやい」と		005
048-12	061-04	洒落 <small>しやれ</small> なんでせう」と	047-15	洒落 <small>しやれ</small> なんでせう」と	○	006
050-02	063-02	トチメンボー、	050-03	トチメンボー、	○	007
051-06	064-07	アンドレア、デル、サルト	050-06	アンドレア、デル、サルト	○	008
051-11	065-01	耳に入る。	050-11	耳に入る。	○	009
052-15	066-07	うまく行きますか」	052-14	うまく行きますか」	○	010
054-14	069-01	しました」第一會としては	053-11	しました」第一會としては	○	011
		寸珍版では、『しました。』第一會としては』				
058-14	074-03	レンブラントが	057-09	レンブラントが	○	012
072-02	091-02	繩をゆるめて	070-01	繩をゆるめて	○	013
072-11	091-10	御面晤 <small>ごめんご</small> を期す	072-11	御面晤 <small>ごめんご</small> を期す		014
073-09	093-02	気になりません」	071-08	気になりません」	○	015
073-12	093-05	思はれます」	071-11	思はれます」	○	016
076-09	097-01	仕舞ひました」	074-06	仕舞ひました」	○	017

081-14	103-08	びかっつ	079-06	びかっつ	「ど」で良いのか?	018
					他の個所でも、例えば「眼をばちつかせて (076-10)」を「眼をばちつかせて (074-07)」に改めているが、それを断っていない。	
083-06	105-06	するの目も眼がぐらぐら	080-12	するの目も、眼がぐらぐら		019
086-04	109-02	動悸がして来た。	083-07	動悸がして来た、	「」で良いのか?	020
					おそらく、初出、単行本における「動悸かして」の濁点欠落を補う訂正個所だと思いが、ついでにこの句の句読点「。」を「、」に改めている。このような修正をかなり随所で行っているようだが、多くはそれを断っていない。	
					ただ、寸珍版では(どうき)と振っているので、九波堂版のうっかり処理。	
087-03	110-03	居りませんからね。」	084-04	居りませんからね」	○ 一三	021
088-09	112-02	二弦琴	085-10	二弦琴		022

085-02では、正しく「二絃琴」としているのど、こっちは単純に誤植。

(第三章)

096-12	121-05	ですね」「ジャム計り	093-06	ですね」「ジャム計り	○ 一四	023
096-13	121-06	ので……」「驚いたな	093-07	ので……」「驚いたな	○ 一五	024
097-13	122-09	見計らつて	094-07	見計らつて	○ 一六	025
099-02	124-05	です」「惜しい事を	095-10	です」「惜しい事を	○ 一七	026
104-11	131-05	貰ひ度ね。」と	100-14	貰ひ度ね。」と		027
105-04	132-01	ます」「希臘語云々	101-07	ます」「希臘語云々	○ 一八	028
107-09	135-01	フヒツ、ゼラルド	103-10	フヒツゼラルド		029
110-05	138-06	の體さ」「結局	106-03	の體さ」「結局	○ 一九	030
118-12	149-03	いゝですね	114-04	いゝですね	○ 二〇	031
119-14	150-08	ます。「團栗なんぞ	115-06	ます。「団栗なんぞ		032
121-08	152-08	御覧なさい」。文句には	116-13	御覧なさい」。文句には		033
123-10	155-04	だらう、「裏の車屋	118-13	だらう」「裏の車屋		034
					九波堂版では、「ついで」を削ってしまった。	
125-50	157-05	入った者じやない	120-06	入ったものじやない	○ 二一	035
125-15	158-03	「ごうした?」「仕方がない	121-01	「ごうした?」「仕方がない	○ 二二	036
128-15	162-01	妖婆	123-12	妖婆	○ 二三	037

131-01	164-08	「金田やんぞも	125-11	「金田やんぞも	○	二四	038
137-03	172-08	御託宣 <small>たくせん</small>	131-09	御託宣	○	二五	039
137-10	173-04	ですから」。「他言をしない	132-01	ですから」。「他言をしない			040
137-14	173-07	茶釜 <small>ちやせん</small>	132-05	茶釜 <small>ちやせん</small>			041
139-13	176-01	思ひます」と演舌の真似	134-02	思ひます」と演舌の真似	○	二六	042
141-02	177-08	ぶく〜だぜ」	135-05	ぶく〜だぜ」	○	二七	043
145-01	182-08	奴鳴る <small>どな</small> 。	138-15	怒鳴る。			044

(第四章)

150-14	189-01	明治の昭代 <small>せうだい</small>	144-08	明治の昭代 <small>しやうだい</small>	○	二八	045
165-01	206-11	引き下 <small>さが</small> つた跡で、鈴木君は	157-14	引き下がった、あとで、鈴木君は			046

過剰校閲? この場合は、不自然。過剰な校閲は他の箇所にもある。行つたなら↓行つたんなら(169-13)等。
異同表で断っていない訂正も目に付く。

168-08	211-05	一番大きいのは	161-03	一番大きいのは	○	二九	047
169-06	212-05	面白いぢやないか	162-01	面白いぢやないか	○	三〇	048

現行の記述法に従うなら「じゃないか」?

170-03	213-07	君は随分時勢 <small>くわ</small> に暗いな」	162-13	君も随分時勢 <small>くわ</small> に暗いな」			049
171-04	215-02	来たんだがね」	163-15	来たんだがね」	○	三一	050
174-09	218-11	遣り損なうなと	166-14	遣り損なうなと	○	三二	051
175-06	219-10	遣つてもごゝ	167-08	遣つてもごゝ	○	三三	052
176-08	221-05	分らん」	168-10	分らん」	○	三四	053
177-15	223-03	持つてるよ」	169-15	持つてるよ」	○	三五	054
178-06	223-09	仮令半株 <small>たてん</small> だつて	170-06	仮令半株 <small>たてん</small> だつて			055
179-03	224-09	凌 <small>しの</small> いで居た」	171-03	凌 <small>しの</small> いで居た」	○	三六	056
182-04	228-08	張る <small>のち</small> 」	174-01	張る <small>のち</small> 」	○	三七	057
182-11	229-03	成程	174-08	成程	○	三八	058
184-03	231-02	違 <small>ちが</small> ひなご」	175-14	違 <small>ちが</small> ひなご」	○	三九	059

(第五章)

191-02	239-08	少なくとも二十四時間	183-02	少なくとも二十四時間	この修正で正しい？	060
205-05	257-05	かつたのですな	196-08	かつたのですな	○ 四〇	061
206-04	258-07	云ふんだ	197-07	云ふんだ	○ 四一	062
208-01	260-09	ないんでせう	199-03	ないんでせう	○ 四二	063
208-04	261-01	違ひます。」	199-06	違ひます」	○ 四三	064
217-03	273-01	小さくなつて	208-03	小さくなつて	○ 四四	065
276-07	220-02	なります。」	210-13	なります」	○ 四五	066
280-05	222-15	「だれに」	213-11	「だれに」	○ 四六	067
281-02	223-09	行き当りばつたり	214-04	行き当りばつたり	○ 四七	068
286-05	227-11	手の届かぬ	218-03	手の届かぬ	○ 四八	069
290-10	231-04	彼岸櫻を誘ふて、	221-08	彼岸櫻を誘ふて、	○ 四八	070
293-11	233-08	喰下がつた	223-11	喰ひ下がつた		071

初出、初版を通じて「彼岸を誘ふて、」としているが、ここでは独自に「桜」を補つたとしている！
この直しを「独自」と謂うのかなー？

(第六章)

308-03	244-12	使へるんです」此鉢が	235-03	使へるんです」此鉢が	○ 四九	072
311-07	247-07	簀垂れの上に	237-11	簀垂れの上に	○ 五〇	073
319-01	253-06	所だ。「妙な所だな」	243-04	所だ「妙な所だな」		074
319-04	253-09	裸蠟燭	243-08	裸蠟燭	○ 五一	075
319-06	253-11	自覚したね」「おや	243-09	自覚したね」「おや	○ 五二	076
321-04	255-03	思つたよ」「もう	244-14	思つたよ」「もう	○ 五三	077
321-08	255-07	仕舞つた。」「なんで、	245-03	仕舞つた」「なんで、		078
322-03	256-04	仕舞つた。」「夫からどう	245-15	仕舞つた」「夫からどう		079
322-09	256-06	失戀できあ。」「どうか	246-01	失戀できあ」「どうか		080

322-11	256-08	「爺さんか」	246-01	「爺さんか」	○	五四	081
323-07	256-15	仕舞った」	246-10	仕舞った」	○	五五	082
325-02	258-03	いゝよ」といやに	247-11	いゝよ」といやに	○	五六	083
327-07	260-02	始まる。迷亭は	249-08	始まる。迷亭は	○	五七	084
330-01	262-02	恠 <small>もた</small> している。	251-06	恠 <small>もた</small> している。	○	五八	085
085							
344-10	273-11	願 <small>ねが</small> はう」と聊 <small>ちやう</small> か本氣	262-07	願 <small>ねが</small> はう」と聊 <small>ちやう</small> か本氣			086
(第七章)							
352-11	280-10	セクスピヤも	269-07	セクスピヤも	○	五九	087
373-06	296-14	トイフェルス、ドレック君	284-11	トイフェルスドレック君			088
				直すんなら、「トイフェルスドレック」じゃねーの？			
394-03	313-04	立ち上がった。	300-01	立ち上がった。	○	六〇	089
(第八章)							
419-10	333-11	癒 <small>い</small> す	320-01	癒 <small>い</small> す	○	六一	090
433-10	344-11	大袈裟な事	330-06	大袈裟な事	○	六二	091
435-01	345-10	是は臥龍窟に	331-04	是は臥龍窟に	○	六三	092
458-08	364-04	「失敬な」と	348-10	「失敬な」と			093
(第九章)							
476-10	379-04	結 <small>け</small> 伽 <small>っか</small> する	362-14	結 <small>け</small> 伽 <small>っか</small> する			結 <small>け</small> 伽 <small>っか</small> 踏 <small>ふ</small> 坐 <small>ざ</small>
478-01	380-04	垂 <small>た</small> れかゝつて居る。	363-12	垂 <small>た</small> れかゝつて居る。			094
		寸珍版では、「垂れかゝて居る。」		九ポ堂版では、「つゝ」「つ」を補ってしまっている。			095
503-11	400-11	御覽 <small>ごらん</small> なさい」	383-02	御覽 <small>ごらん</small> なさい」	○	六四	096
512-02	407-01	云 <small>い</small> つてるね」	389-03	云 <small>い</small> つてるね」	○	六五	097
535-03	424-14	分 <small>わ</small> らなくなつた」	406-04	分 <small>わ</small> らなくなつた。」			おいおい！ 098

(第十章)

567-01	450-10	ですもの」	430-05	ですもの」	○	六六	099
568-09	452-01	ないんですよ」	431-10	ないんですよ」	○	六七	100
568-10	452-02	入らしやる	431-11	入らしやる			101
590-06	468-12	しまつた」	447-14	しまつた」	○	六八	102
594-10	472-01	潜然 <small>さんぜん</small> として	451-02	潜然 <small>さんぜん</small> として			103
		寸珍版では「潜然」					
605-08	480-09	何をしたんだい」	459-03	何をしたんだい」	○	六九	104
613-60	486-08	どやされたりして <small>しか</small> 而も	464-15	どやされたりして、 <small>しか</small> 而も			105

うーむ。他の個所でも相当いじっているけど……。

(第十一章)

634-01	502-13	呉れ玉く。」	480-13	「這入って失敬仕り候。一寸此白をとって呉れ玉く」			106
		くれ給く」502-15		くれ給く」480-15			
		呉れ玉く。」		「這」が旧字のまま。			
675-06	534-13	amicitiae	511-12	amicitiae	○	七〇	107
682-02	539-15	持ち主ぢ」	516-10	持ち主ぢ」	○	七一	108
684-03	541-08	「え」と云ひながら	518-04	「え」と云ひながら			109
703-01	556-03	馬鹿々々しい」	532-05	馬鹿々々しい」	○	七二	110
717-10	567-10	獨仙君。」	543-04	獨仙君」			111
723-08	572-03	階老同穴 <small>かいろうどうけつ</small>	547-09	階老同穴 <small>かいろうどうけつ</small>			112

九ノ堂版『吾輩は猫である』正誤表

頁・行 誤 ↓ 正

121-03	御覧なさい」主人が	↓	御覧なさい」と主人が 126-15
	細君の是丈は	↓	細君も是丈は
128-13	天晴な美學だ。	↓	天晴な美學だ。
135-08	旦那様	↓	旦那様
142-08	癩癩病み	↓	癩癩病
144-11	碌な者でない極まつて	↓	碌な者でないに極まつて
159-09	十年持った	↓	十年持った
182-13	ものか」主人はいまでも	↓	ものか」と主人はいまでも
163-02	貰へ」主人は	↓	貰へ」と主人は
193-07	左の手や拇指	↓	左の手の拇指
197-06	孔の内側に	↓	孔の向側に
227-08	火消丈が	↓	火消壺丈が
262-03	あるんだか、	↓	あるんだが、
278-02	主人の第二女	↓	主人の第三女
301-05	頓に衰へて	↓	頓に衰へて
312-01	極つてる。	↓	極つてる。
313-15	群衆を壓倒して	↓	群小を壓倒して
316-04	出た	↓	出た
352-05	違ないんでから	↓	違ないんですから
393-06	出は低い	↓	山は低い
424-06	削つてかみ合ひ	↓	削つてつかみ合ひ
444-09	拾ひ始めて。	↓	拾ひ始めた。
444-11	飯を匆ね上げた時	↓	箸を匆ね上げた時
507-01	長き夜守るヴィオリン	↓	長き夜守るやヴィオリン
527-09	私だつてヴィオリンは	↓	私だつてヴィオリンは
528-07	迷亭先生	↓	迷亭先生
528-15	話して行くのは	↓	話して行くのは
529-13	首騎町	↓	百騎町
534-13	「一の」行や」	↓	「一の」行や」
538-02	大將隅の方に	↓	大將隅の方に
541-08	一筋長々と	↓	一筋長々と
559-06	呑んだくれの顔	↓	呑んだくれの類
575-13	さうですれども、	↓	さうですれども、
582-14	なかばつてんか	↓	なかばつてんか